

組の方から青木軍医が応援に来てくれましたが、私が治ると同時に今度は青木軍医が寝込んでしまい、発熱が続いていましたが、急に鬼籍に入りました。私のために来られて死亡され、すこぶる残念で何とも言葉がありませんでした。

かくして五百人中、約百人余が死亡しました（昭和二十一年一月から五月まで）。この人たちは、小屋の裏の小山に埋葬されました。今、思い出しても涙が出そうです。

私の抑留記

千葉県 綾部 嶺 男

私は、満州の公主嶺というところで日本軍の無条件降伏を知り、生きて祖国日本へ帰ることができないと信じ、戦友と自決の覚悟を決めておりました。

そのうちソ連軍の進駐により武装解除、「近日中ヤポンスキーは日本へ帰ることができるので安心しろ」

の言葉を信じて兵舎に約二カ月收容され、その間大した作業もなく、いつ帰国かと待ちわびていた毎日でした。

十月下旬ごろであったか、「お前たちは帰国できるぞ」とのソ連兵の言葉に、貨車に乗り込み安心と喜びでいっぱいであったが、どうも方向が北の方へと進むので「おかしいぞ」と思いましたら、ソ連領へ入りました。

バイカル湖チエレンホーボ第六收容所に收容された。帰れると思っていた、それが收容所に入れられてはすぐに帰ることはできないであろう。次に強制労働、しかも炭鉱作業という過酷なる重労働を強制され、飢えと寒さに耐え、遠い祖国の山河を思い、むなしい日々を送ったのでした。昭和二十年暮れから二十一年春まで、寒さと食糧不足、強制労働のために数多くの人々が亡くなり、明日は我が身かなと思いました。

やがておそい春を迎えるころにはいくらか氣候風土に慣れ、よもぎの野草を摘み、ゆでて食糧不足を補いました。五月ごろより休みの日は月二回ほど素人演芸

会等が開かれ、ほんの一時を苦しい労働から解放され、楽しい時間を過ごすことができました。

夏はほんとうに短く十日ほどですが、ソ連の娘たちとふざけながら水遊びもいたしました。やがて秋になりますと木の実とり。木の大きさは山つつじほどですが、赤い実が沢山なり、ソ連の若い主婦や娘たちが多く来て、タバコ、パンなどと物々交換をいたしました。この実を樽詰めにして発酵させるとブドウ酒のようになり、アルコール抜き私の生活では一口二口飲むとほろ酔い気分になり、快い気持ちになった。また冬が到来し、氷点下四〇度を超えますと作業は中止となりますが、凍傷者が多くソ連兵に叱られました。

やがて二十二年を迎え、今日も明日も炭鉱作業を続け、いつ日本に帰れるか待ちわびる日々であった。日本で言えば「佐渡の金山、この世の地獄」と言われましたが、四十過ぎれば皆あの世行き、私は二十三歳であり、どうやら体がもちこたえ強制労働に耐えました。二十三年六月中旬、「ダモイ」の声で日本送還が決

まりました。ソ連兵にはいつもウソを言われておりましたので信用いたしかねましたが、ようやく貨車に乗りナホトカに着き明優丸に乗船。どこの港に着くかと不安でしたが、舞鶴港に上陸、懐かしい祖国の土を踏むことができました。検閲などその他の手続を終え、我が故郷佐賀町鶴岡の自宅へ二十三年七月二日無事に着いたし、親兄弟と懐かしい対面となりました。

私は生きて祖国の土を踏むことができましたが、異郷の地シベリアで同僚がたくさん、寂しく亡くなられました。できれば遺骨の収集、墓参りにまいりたいと思います。亡き友の冥福を祈る今日このごろです。

軍歴

昭和十九年十二月十日 東部第三十四部隊入隊
同年十二月十五日 下関より釜山上陸 北支へ
第十四師団 弘第一五六二七部隊川瀬隊第三中隊
へ通信兵として
在ソ期間 二年八カ月